現在の日本に於ける盆栽事情と、今後の課題について

平松春松園
平　松　浩　二

皆さんは、盆栽と聞いてどんな事を思い浮かべるでしょうか。一般の方に盆栽のイメージを質問すると年寄りの趣味と答える方がほとんどで、実際多くの愛好家が高齢者と言うのが紛れもない現実。そもそも、盆栽という単語自体知らないという若者に遭遇した時は自分の仕事ながら、その認知度の低さに愕然とした経験もあります。

室町時代以降、中国から伝わったと言われる日本の盆栽は、長い年月をかけ日本独自の進化を遂げ世界のトップの地位を確立した。日本で最も権威のある国風展は、今年で九十二回を数え盆栽の銘品を鑑賞する事が出来る日本最大のイベントである。特にここ数年、海外からの来場者も増加し国際的なイベントにもなってきている。

最近、盆栽という言葉を雑誌、テレビ、インターネットで見聞きする事が多くなったように感じることがあるのではないでしょうか。

と、いうのも今年五月に、さいたまスーパーアリーナで盆栽の世界大会が二十八年ぶりに日本で開催された事に関連しているものだと思います。盆栽の世界大会？ と思われる方もおられると思いますが、二十八年前に埼玉県大宮市（現さいたま市）で第一回世界盆栽大会が開催され、それ以降四年に一度世界各地域持ち回りで開催される盆栽界におけるオリンピックの様な展示会です。

埼玉世界大会２０１７

開催当時の１９７０年代ヨーロッパを中心に盆栽が人気となり、その流れを受け世界中を巻き込んだ盆栽展を開催するべく、当時の日本盆栽協会の加藤三郎氏（加藤蔓青園　三代目園主）を中心に世界盆栽友好連盟が設立され、第一回世界大会を成功裏に収めました。

加藤氏ら、先人達の尽力により今回埼玉での大会成功に繋がってきたものだと、大会に参加をして肌で感じました。

今回の第八回世界盆栽大会では三日間で来場者数四万五千人を超え、世界四十カ国から五百人を超える参加があったと、報告されました。また同時に、次の世界大会はオーストラリア、パースでの開催が決定しました。

ここで私の地元である香川県高松市の話も紹介させていただきたいのですが、高松市では二〇一一年アスパック盆栽・水石大会を開催しました。この大会はインドネシアの盆栽愛好家を中心に設立されたアジアを中心とした大会で日本での開催は初めてでした。当時海外での大会を見聞きしていたものの、ノウハウもなく開催までの二年間は、地元業者一丸となり、成功に終わったものの、それまでのつらい記憶を世界大会で思い出しました。

海外の大会で日本と違うイベントとして、デモンストレーションという催しがあります。これは、ステージの上で実際に観客に盆栽の手入れを見せるもので外国人らしい発想の催しです。観客を楽しませるという海外の方々特有の発想であり、お客様を楽しませるという発想のなかった日本の盆栽界が最も見習い、反省するところだと感じます。

ベルギー、デモンストレーション風景

高松での大会では地元を代表して、デモンストレーションを披露させていただきました。その緊張感は今でも思い出すと、身震いを感じます。

デモンストレーション

それ以降私自身、海外から招聘され展示会講習会に行くようになり、数えてみると、七カ国、三〇回程度になりました。２年前インドに招待された時はさすがに、カルチャーショックをうけましたが、また来年も行く予定になっています。

フランスでの講習会

高松盆栽大会を契機にフェイスブックを始めましたが、現在は四〇〇〇人ほどの海外の方とインターネットを通じて繋がっており、外国人とのやり取りも簡単に出来る様になりました。

この様に今、日本の盆栽界も海外抜きには語れなくなり、埼玉大会の盛り上がりを受けて益々海外での盆栽熱に拍車がかかるものだと思います。

ここで、日本の盆栽界に目を向けてみると実態はいかがなものでしょうか。

先に述べた世界大会の盛り上がりにもかかわらず、日本の誇るべき伝統文化でありながら、その姿を消しつつある様々な物づくりと同様に、私たち盆栽業界も衰退していくのではないかという不安を常に抱えています。

というのも、バブル崩壊以降日本の盆栽界も国内では低迷を続けており、日本最大の盆栽愛好家組織である（一社）日本盆栽協会の会員数も三〇年ほど前に比べると三分の一までに減少し、今の会員年齢を考えると十年後は組織自体の運営にも支障をきたす状況に陥るかもしれません。

そういう状況のなか、日本での景気低迷に反比例するように、海外での盆栽人気は高まりを増し、業界としても販売を海外に向ける方向にシフトしてきました。

現在では、ほとんどの業者が海外との接点を持ち経営を成り立たせています。

業界全体、外国との取引が増加するのを受けて四年程前に、農林水産省が主体で輸出戦略協議会を立ち上げ盆栽輸出の取り組みも始まりました。

植物輸出の最大のネックは、検疫問題である事は言うまでもなく周知の事ですが、ここに国同士の交渉で風穴を開けようと言う事です。現在、交渉を進めているのがＥＵで輸入禁止品目となっている黒松を、三年後を目処に輸入解禁品目にするべく様々な条件を一個ずつ、クリアしているところです。

「盆栽と言えば黒松」と言うほど人気樹種の一つです。黒松の輸出が可能になれば、業界全体が活性化する事は間違いなく、我々も切望するところです。

ここで、日本における盆栽経営形態の説明をさせていただくことにします。

盆栽を生産する生産者、その生産者から盆栽を購入し一般大衆に盆栽を販売する業者、日本に古くから受け継いでこられた、いわゆる名品を扱っている業者、大体大まかにはこの三種類に分類されます。

私の地元高松は特に黒松の生産地として昔から知られており、国内生産の八割のシェアを誇っていますが、現実問題として特に問題なのがいわゆる後継者不足です。かつて大小併せて三百ほどの生産者が存在した高松では現在五十以下に減り、今の生産者の年齢を考えると十年後にはその半数以下になると予測されます。というのも盆栽を生産して商品にするまでには、当然野菜などと違い年単位です。私の盆栽園でも祖父から育てている一〇〇年を超えるものもあります。

そのために、新規参入が難しく世襲でないと収入を得る事が出来ないのです。

私自身、盆栽園の四代目で先代のおかげで飯が喰えているわけです。業界でも新規で始める業者は稀で、成功する者は、もっと少なくなります。

それに加えて盆栽には、毎日の水やりは欠かすことが出来ない、つまり休みが無いという事で、この状況

では、当然後を継ぎたいと言う人間は減り続けていく現実に直面しています。

私が家業を継いだのが二十七年程前ですが、それ以降約三〇年で後を継いだのは、地元でわずか五軒しかありません。高松での状況は全国でも同じで非常に厳しい状況にあります。

海外での盆栽人気と逆行する形で日本での生産量は減り続けているのです。

前にも述べたように、海外への盆栽輸出が解禁になったとしても、売る商品が無いのでは本末転倒という形で終わる可能性さえありうるのです。

そういう状況を踏まえて、高松では香川県主導で、うどんと肩を並べる位の知名度がある地場産業でもある盆栽を活性化しようと、今年盆栽の里構想を立ち上げました。

特に高松は各盆栽園が地理的にも近く、観光客にとっても非常に便利なところであることから、現在の施設を利用しつつ、まず盆栽の観光の拠点を整備していこうと言う事です。

現在、埼玉県さいたま市には、盆栽村があり、盆栽美術館も整備され、世界の盆栽の聖地とさえいわれています。

高松もそれを目指し、地方に特化した物をつくっていこうという計画です。

それに加え、最近海外からの問い合わせが多いのが、日本に来て盆栽を学びたいと言う人の増加です。私の盆栽園でも２年ほど前から可能な限り受け入れを行ってきました。

研修生　フランス、スペイン、中国

全国の有名な盆栽園では、すでに海外の研修生を受け入れており、自国へ帰り盆栽園を経営している人も増えてきています。

高松で観光拠点を整備すると同時に、そういった海外からの研修生の受け入れ体制を整備しようという試みも、もう一つの柱であります。盆栽に特化しながら他の地場産業とも協力しつつ、地方でも魅力のある街づくりをやろうという計画です。

２０２０年には、東京でのオリンピック開催が決定しており、其れに伴い海外から来日する観光客は黙っていても増加してきます。

こういったせっかくのチャンスを利用して、チャレンジしなければ、盆栽界の未来は見えてこないでしょう。黙って、盆栽を購入する客を待つ時代はもうすでに終わったのです。

こちらからの、仕掛けが必要不可欠です。年寄りの趣味というイメージは、崩せないでしょうが、若い年代に少しでも興味を持ってもらう試みをやっていくべきであり、さもないと盆栽界の未来はありません。

高松では盆クラという、いわゆるガールズユニットが、高松盆栽のＰＲに一役買っています。周りから見るとばからしいと見えるかもしれませんが、先日ハリウッドの映画祭に参加し、盆栽体操のミュージックビデオを披露して２部門で受賞し、地元で話題になっています。

高松盆栽ＰＲ　盆クラ

昔はいい時代だったと、年配の盆栽業者が酒の席で話すのはもう聞き飽きました。

これといった明確な打開策はまずありません。ただ前に進むだけです。

今回「花葉」の原稿執筆の話をいただいて盆栽についてもう一度改めて考え直す事が出来、初心に帰る事が出来ました。今回依頼して頂いた渡辺先生には、本当に感謝しております。

ＪＡ香川県国分寺盆栽部会　　部会長
（公社）全日本小品盆栽協会　常務理事
香川県盆栽生産振興協議会　　副会長